

[A年] 公現後第2主日(2021年1月17日)**【旧約聖書日課】 エゼキエル書2章1節～3章4節**

2¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、自分の足で立て。わたしはあなたに命じる。」²彼がわたしに語り始めたとき、霊がわたしの中に入り、わたしを自分の足で立たせた。わたしは語りかける者に耳を傾けた。³主は言われた。「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らは、その先祖たちと同様わたしに背いて、今日この日に至っている。⁴恥知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす。彼らに言いなさい、主なる神はこう言われる、と。⁵彼らが聞き入れようと、また、反逆の家なのだから拒もうとも、彼らは自分たちの間に預言者がいたことを知るであろう。⁶人の子よ、あなたはあざみと茨に押しつけられ、蠍の上に座らされても、彼らを恐れてはならない。またその言葉を恐れてはならない。彼らが反逆の家だからといって、彼らの言葉を恐れ、彼らの前にたじろいではならない。⁷たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたはわたしの言葉を語らなければならない。彼らは反逆の家なのだ。⁸人の子よ、わたしがあなたに語ることを聞きなさい。あなたは反逆の家のように背いてはならない。口を開いて、わたしが与えるものを食べなさい。」⁹わたしが見ていると、手がわたしに差し伸べられており、その手に巻物があるではないか。¹⁰彼がそれをわたしの前に開くと、表にも裏にも文字が記されていた。それは哀歌と、呻きと、嘆きの言葉であった。

3¹彼はわたしに言われた。「人の子よ、目の前にあるものを食べなさい。この巻物を食べ、行ってイスラエルの家に語りなさい。」²わたしが口を開くと、主はこの巻物をわたしに食べさせて、³言われた。「人の子よ、わたしが与えるこの巻物を胃袋に入れ、腹を満たせ。」わたしがそれを食べると、それは蜜のように口に甘かった。

4¹主はわたしに言われた。「人の子よ、イスラエルの家に行き、わたしの言葉を彼らに語りなさい。

「聖書協会共同訳」(2018年版) 読み比べ**エゼキエル書 2章1節～3章4節**

2¹主は私に言われた。「人の子よ、自分の足で立ちなさい。私はあなたに語ろう。」²主が語られたとき、霊が私の中に入り、私を自分の足で立たせた。私は、語りかける者に耳を傾けた。

3¹主は言われた。「人の子よ、私はあなたをイスラエルの子ら、すなわち、私に逆らう反逆の国民に遣わす。彼らもその先祖も私に背き、今日に至っている。⁴その子らは恥知らずで強情である。私はあなたを彼らに遣わす。そこで彼らに『主なる神はこう言われる』と言いなさい。⁵彼らが聞こうと、反逆の家ゆえに拒もうと、自分たちの間に一人の預言者がいたことを知るようになる。

6¹人の子よ、あなたは彼らを恐れてはならない。その言葉を恐れてはならない。たとえあなたが、いらくさと棘の中にいて、また、さそりの上に座すとしても、彼らが反逆の家だからといって、その言葉を恐れてはならない。彼らの前におのいてはならない。⁷彼らが聞こうと、反逆の家ゆえに拒もうと、私の言葉を語らなければならない。⁸人の子よ、あなたは私が語ることを聞きなさい。反逆の家のように逆らってはならない。口を開け、私が与えるものを食べなさい。」⁹私が見ていると、手が私に差し伸べられており、その手には巻物があった。¹⁰彼が私の前でそれを広げると、そこには表にも裏にも文字が書かれていた。書かれていたのは、哀歌と呻きと嘆きであった。

3¹主は私に言われた。「人の子よ、あなたが見つけたものを食べなさい。この巻物を食べ、行って、イスラエルの家に語りなさい。」²私が口を開けると、主は私にその巻物を食べさせ、³言われた。「人の子よ、私が与えるこの巻物を食べ、それで腹を満たしなさい。」私がそれを食べると、口の中で蜜のように甘かった。

4¹主は私に言われた。「人の子よ、さあ、イスラエルの家に行き、私の言葉を彼らに語りなさい。

(新共同訳)

【使徒書日課】ヨハネの黙示録10章8～11節

8すると、天から聞こえたあの声が、再びわたしに語りかけて、こう言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取れ。」9そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使はわたしに言った。「受け取って、食べてしまえ。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」10わたしは、その小さな巻物を天使の手から受け取って、食べてしまった。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると、わたしの腹は苦くなった。11すると、わたしにこう語りかける声が聞こえた。「あなたは、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて、再び預言しなければならない。」

【福音書日課】マタイによる福音書4章18～25節

18イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。19イエスは、「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20二人はすぐに網を捨てて従った。21そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になると、彼らをお呼びになった。22この二人もすぐに、舟と父親とを残してイエスに従った。

23イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、また、民衆のありとあらゆる病気や患いをいやされた。24そこで、イエスの評判がシリア中に広まった。人々がイエスのところへ、いろいろな病気や苦しみに悩む者、悪霊に取りつかれた者、てんかんの者、中風の者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々をいやされた。25こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、ヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに従った。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

ヨハネの黙示録 10章8～11節

8すると、天から聞こえたあの声が、再び私に語りかけて言った。「さあ行って、海と地の上に立っている天使の手にある、開かれた巻物を受け取りなさい。」9そこで、天使のところへ行き、「その小さな巻物をください」と言った。すると、天使は私に言った。「それを取って食べなさい。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」10そこで私は、その小さな巻物を天使の手から受け取り、すべて食べた。それは、口には蜜のように甘かったが、食べると腹には苦かった〔直訳→腹が苦くなった〕。11そして、私に語りかけるのを聞いた。「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて預言しなければならない。」

マタイによる福音書 4章18～25節

18イエスは、ガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖〔直訳→海〕で網を打っているのを御覧になった。彼らは漁師だった。19イエスは、「私に付いて来なさい。人間をとる漁師にしよう」と言われた。20二人はすぐに網を捨てて従った。

21そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父ゼベダイと一緒に、舟の中で網の手入れをしているのを御覧になり、二人をお呼びになった。22彼らはすぐに舟と父を残して、イエスに従った。

23イエスはガリラヤ中を回って、諸会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民衆のありとあらゆる病気や患いを癒された。24そこで、イエスの評判がシリア中に広まり、人々がイエスのところへ、いろいろな病気や痛み苦しむ者、悪霊に取りつかれた者、発作に悩む者、体の麻痺した者など、あらゆる病人を連れて来たので、これらの人々を癒された。25こうして、ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤ、さらにヨルダン川の向こう側から、大勢の群衆が来てイエスに付いて行った。

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・1月17日「公現後第2主日(降誕節第4主日)」の日課主題は「最初の弟子たち」。福音書は、主イエスに従う者たちのことをもっぱら「弟子」として描いており、「教師(ディダスカロス)－弟子(マテエース)」という関係性を強調しているが、同時に「主人(キュリオス)－僕・奴隷(ドゥーロス)」という関係性も常に考えられている。「教師－弟子」という関係性は、洗礼者ヨハネの集団でも描かれている。当時のユダヤ教社会では、「ラビのもとで律法を学ぶ生徒」という関係性が広く知られており、主イエスと彼に従った者たちの集団もおのずとそのような関係性を育んでいったのであろう。一方で、「使徒言行録」などでは、自称として「この道に従う者」という表現や、周囲からの呼称として「キリスト者(クリスティアノス)」という表現もあり、多様な理解があったことをうかがわせられる。

・旧約において、「弟子」は「預言者」集団に属する者について用いられる例があるが(イザヤ8:16、同50:4、アモス7:14など)、用例は少ない。「教師－弟子」という関係性が、旧約における信仰理解の中に位置を得ていないということであろう。にもかかわらず、限られた「預言者」集団の描写は、福音書の「主イエスと弟子」の関係性を理解する上で少なからず影響を及ぼしたと考えられる。たとえば、預言者エリヤと彼の後継者エリシャの関係性(王上19章、王下2章)は、福音書における「弟子」のあり方を教える主イエスの言葉(マタイ8:19以下、ルカ9:57以下)への影響を見て取ることができる。

旧約日課(エゼキエル2～3章より)

・「エゼキエル書」は、旧約正典中「後の預言者」の第三巻、「三大預言書」の一つ。「預言者エゼキエル」は、祭司の家に生まれたが、バビロニアの侵攻により支配下に置かれた南王国ユダから早くに(おそらく前597年頃の第一次捕囚期に)バビロンに移住させられ、バビロンの地で祭司の任職を受けると共に「預言者」としての活動を始めた。エゼキエルの預言は、終始、バビロンの地において告げられたものであると考えられ、「イザヤ書」6章に描かれるような神殿祭儀執行中に見た幻という体裁を装っているが、エルサレム神殿のそれとは大きく異なる様相の幻となっている。また、後半には黙示文学的表現を用いた「終末的預言」が置かれているが、「新しい神殿再建」の具体的なイメージが描かれるように、どちらかと言うとエルサレム中心の祭儀伝統主義的の神学に立っており、必ずしも「イザヤ」や「エレミヤ」で強調されるような「申命記史観」に立った律法主義神学を基軸としてはいない。とは言え、「エゼキエル書」は、「イザヤ～エレミヤ」の伝統を継承する預言者集団の営みの中に置かれているとおり、祭儀伝統主義的「神殿」神学と律法主義的「申命記」神学を調停するものとして位置づけられたのだろう。

・日課箇所は、1～3章にかけてエゼキエルの「召命」を物語る中の一部。「預言者」としての召命は、「反逆の家」であるイスラエルに対して、神の告げる言葉を語ることに召しとして描かれる。ただし、ここで告げるべき神の言葉は「巻物」として与えられると描かれるように、超自然的な仕方では告げられるのとは異なるものであることが示唆されている。これは、「エレミヤ」らが中心のかかわったヨシヤ王の改革(前622年頃～609年頃)の端緒になったとされる、神殿で新たに見つけれられた「律法書」(王下22:8)のことを指しているのかもしれないし、「イザヤ書」をはじめとする預言者の伝統に立つ集団によって継承され始めていた「証し書」(イザヤ8:16)のことを指しているのかもしれない。いずれにしても、「巻物」という文書化されたものに「神の言葉」としての権威を認めるという点には、律法主義的「申命記」神学の強い影響が見られる。

・「神の言葉」としての「巻物」を食物のように食すという比喩表現は、「申命記」8章などにおいて、「マナ＝パン」の出来事が「神の言葉」の意義を理解するための逸話として援用された表現と重なる。

使徒書日課(黙示録10章より)

・「ヨハネの黙示録」は、「新約」の終わりに置かれた黙示文学的文書であるが、形式的には他の使徒書と同様に「書簡」形式で整えられた教会間回覧文書である。宛先として「アジアの七つの教会」が明記されているように、アジア(現在のトルコ西部、アナトリア半島のエーゲ海に面した地域)の文化的社会的背景を踏まえた文書として整えられたものと推認される。この地域は、先史時代からさまざまな民族・部族が往来し、都市を形成してきたが、紀元前6世紀以降、ペルシア、マケドニア、セレウコス朝シリア、ローマ帝国などの覇権国家の支配下に置かれ、その都度支配者に従順に服してきた。「黙示録」は、この地域で皇帝礼拝が積極的に受け入れられていった時代に、キリスト信仰が「皇帝」とは異なる「主(キュリオス)」に仕える国家反逆行為として弾圧の対象になる中、迫害に耐え抜いた先にある希望としての「終末」の完成を指し示す文書として諸教会に受け入れられた。新約文書の中では、最も遅い時期に執筆された文書の一つと考えられているが、使徒パウロの神学的影響を受けながら、基本的に旧約諸文書に立脚した「幻」をもって教えを綴っている。

・日課箇所は、「エゼキエル書」2:1～3:4を敷衍した幻として記されている。ただし、預言者エゼキエルが、「巻物」を食べることによって与えられた「神の言葉」を、「反逆の家」である「イスラエル」に対して告げるように命じられているのに対して、「黙示録」の「ヨハネ」は、「多くの民族、国民、言葉の違う民、また、王たちについて(エピー→に対して)、再び預言」するようにと命じられており、対象の視野が拡大されている。

福音書日課(マタイ4章より)

・日課箇所は、共観福音書が共通して伝える「四人の漁師が弟子になる」場面である。ただし、マタイ福音書とマルコ福音書がほぼ同じ内容で伝えるのに対して、ルカ福音書は異なる状況の中で起こったシモン・ペトロの個人的体験を軸にして描いている。また、主イエスの最初の弟子が誰であったのかを、ヨハネ福音書は異なる出来事として伝えている。

・マタイ福音書とマルコ福音書がほぼ同様に伝えるところによれば、主イエスは、4人の漁師たちがそれぞれに自分の生業に勤しんでいるところをご覧になって、そこから弟子として従うように呼び出された。一方、ルカ福音書は、主イエスが、彼らの仕事の合間に、自分の宣教活動に協力してくれるように依頼して、まず協力者としての関係を持ち、さらに主イエス自身が彼らの生業の中に入り込んでいくことを通して、彼ら自身が自発的に従う決心を持つようになったと描く。ヨハネ福音書の場合は、洗礼者ヨハネの弟子だった者たちがヨハネの指示に従って主イエスに従うようになったことが発端となって、弟子たちが従うようになる。

・彼ら最初の弟子たちが「漁師」であったことは確かなのであろう。しかし、それは、彼らが無学で粗野な人間であったということの意味するわけではない。むしろ、ヨハネ福音書が伝えていることから、彼らも熱心に宗教家に弟子入りして「律法」を学んでいる者であったことが推察される。また、彼らが住居を置き拠点としていたカファルナウムは、当時、ローマ軍の駐屯地も置かれる重要都市で、ガリラヤ湖を漁場として水揚げされる漁獲類を塩漬け加工する工場や、それらを交易者と売買する市場も整えられていたとされ、漁師であっても、そのような人々との交流を通して、公用語のギリシア語を一定程度使いこなしていた可能性が高い。つまり、彼らと主イエスとの間に、知的・宗教的水準という点で大きな差があったとは考えにくい。にもかかわらず、彼らは、少なくとも初代教会として歩み始めて以降、主イエスを「師」とする「弟子」としての自覚を保持し続けた。主イエスの言動の中に、明らかに「模範」とすべき側面を見出だしていたからである。

来週の誕生日 (1月17日～23日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-3 番「扉を開きて」(= I 61「かがやくみとのよ」)は、17-18世紀ドイツのカトリックと対立の激しい地方で牧師となった多作の讃美歌作家シュモルクの作詞。曲は、17世紀ドイツの改革派の牧師ネアンダー(本名はノイマン)が詩編歌用に作曲。ネアンダーが住んだデュッセルドルフ近郊の谷は、彼にちなんで「ネアンデル谷」と呼ばれるようになったが、そこで発見されたヒトの化石が「ネアンデルタール人」。

・こどもさんびか-123 番「わたしはしゅのこどもです」は、作者不詳となっているが、『日曜学校讃美歌』(1923年版)では、原題「We're a Band of children」からの訳詞讃美歌とされている。この原題の讃美歌については、いくつかの候補が挙げられるが、確実な原作は知られていない。

・21-505 番「歩ませてください」(曲 = I 353)は、19世紀末米国の会衆派牧師 W.グラッドンが雑誌に掲載する宗教自由詩として創作したものが原作で、その後、グラッドンの指定した曲とのセットで讃美歌集に採用され、広く歌われるようになった。この曲は、もともと「わが魂のひかり」(21-214 番)のために作曲されたもの。

21-3「扉を開きて」**Tut mir auf die schöne Pforte**

- 1) Tut mir auf die schöne Pforte, / führt in Gottes Haus mich ein; / ach wie wird an diesem Orte / meine Seele fröhlich sein! / Hier ist Gottes Angesicht, / hier ist lauter Trost und Licht.
- 2) Ich bin, Herr, zu dir gekommen, / komme du nun auch zu mir. / Wo du Wohnung hast genommen, / da ist lauter Himmel hier. / Zieh in meinem Herzen ein, / laß es deinen Tempel sein.
- 3) Laß in Furcht mich vor dich treten, / heilige du Leib und Geist, / daß mein Singen und mein Beten / ein gefällig Opfer heißt. / Heilige du Mund und Ohr, / zieh das Herze ganz empor.
- 4) Mache mich zum guten Lande, / wenn dein Samkorn auf mich fällt. / Gib mir Licht in dem Verstande / und, was mir wird vorgestellt, / präge du im Herzen ein, / laß es mir zur Frucht gedeihn.
- 5) Stärk in mir den schwachen Glauben, / laß dein teures Kleinod mir / nimmer aus dem Herzen rauben, / halte mir dein Wort stets für, / daß es mir zum Leitstern dient / und zum Trost im Herzen grünt.
- 6) Rede, Herr, so will ich hören, / und dein Wille werd erfüllt; / nichts laß meine Andacht stören, / wenn der Brunn des Lebens quillt; / speise mich mit Himmelsbrot, / tröste mich in aller Not.

21-505「歩ませてください」**O Master, Let Me Walk with Thee**

1. O Master, let me walk with Thee / in lowly paths of service free; / tell me Thy secret; help me bear / the strain of toil, the fret of care.
2. Help me the slow of heart to move / by some clear, winning word of love; / teach me the wayward feet to stay, / and guide them in the homeward way.
3. Teach me Thy patience, still with Thee / in closer, dearer company, / in work that keeps faith sweet and strong, / in trust that triumphs over wrong.
4. In hope that sends a shining ray / far down the future's broad'ning way; / in peace that only Thou canst give, / with Thee, O Master, let me live.